

JANES

ニュースレター

No. 30-1
Dec. 2022

日本ナイル・エチオピア学会

- 巻頭言
- 第31回日本ナイル・エチオピア学会学術大会最優秀発表者エッセイ
- フィールド通信
- 学会動向
- 会員の異動



巻頭言



友人との再会

Yuka Kodama

児玉 由佳
(アジア経済研究所)

「由佳、今の仕事なんかより、うちの革を日本で売らないか」

これがアデイスアベバで会う時のアルマイェフのお決まりの台詞である。アルマイェフは民間のなめし皮工場の経営者で、デルグ時代の荒波も乗り切ったつわものなのだが、柔和で静かな人である。羊皮の流通を調べていた1998年に知り合って以来、四半世紀近い付き合いとなる。80歳を超えて引退し、息子に事業を託したという。アルマイェフとはいつもオリンピックそばのグリーククラブで昼食を食べるのだが、今回

はその息子も同席していた。息子はアルマイェフのお決まりの台詞を無表情のまま聞きながしてサラダを食べていた。

この夏に1週間だけだがアデイスアベバを訪問した。新型コロナウイルス感染拡大のため3年ぶりのエチオピアである。幸いにも知り合いは皆コロナ禍を乗り切っていたが、3年も間が空くとお互いの老化に驚くばかり。ほかの友人からは、出会ったころに生まれた子どもが結婚してもうすぐ子どもが生まれると報告をうけるなど、年月の流れをしみじみ思う。

インフォーマントというよりもはや友人とよぶべき人々、その多くが私よりも年上である。友人の子どもた

ちと一緒に会うことも増えた。共に1990年代後半から今まで同じ時間を過ごしてきた人々との関係はかけがえのないものである。一方、私よりも一回りも二回りも年下の子どもたちの世代にとっては、私は外国人のおばはんであり、友人ではない。私にとっても、若者世代がどのような生活を送っているのか興味深くはあるが、彼らの世代の調査には、若い研究者たちがふさわしい。

食事を終えて、私に別れを告げ、息子に支えられながら車に乗り込むアルマイェフの姿を見送りながら、彼やエチオピアの友人たちの健康を祈った。

日本ナイル・エチオピア学会第31回 学術大会最優秀発表受賞者エッセイ

16～19世紀エチオピア北 部における副食

Hiroki Ishikawa

石川 博樹

(東京外国語大学)

第31回学術大会最優秀発表賞を受賞し、大変光栄です。受賞対象となった口頭発表では、16世紀から19世紀にかけてのエチオピア北部における副食について検討した結果を報告しました。この副食に関する研究は、2021年4月に開催された第30回学術大会において最優秀発表賞を受賞したテフとインジェラに関する研究を進めるなかで必要性を感じ、着手したものです。

しばしば「エチオピアを代表する食品」と呼ばれる酸味のあるパンケーキ状のインジェラの成立と、その主な材料であるイネ科の穀類テフの主食化の時期に関する研究については、第30回学術大会において発表を行った後に論考としてまとめ、オンライン学術雑誌『農耕の技術と文化』に「16～18世紀のエチオピア北部におけるテフの消費拡大とインジェラの成立」(第30号,1-35頁)として掲載していただきました。

この論考では、テフ粉でつくられたパンが1520年代にはエチオピア北部において未だ主食としての地位を獲得していなかったこと、その後17世紀初頭までにテフを食べる習慣が民衆の間に広まり、さらに18世紀後半までにテフ粉パンが貴族層にまで好まれるようになったこと、そして18世紀後半に現在のインジェラの原型になったと思われる酸味のあるパンケーキ状の食品が成立したものの、1840年代前半に至っても現在のインジェラの調理技法が確立されていなかったことを示しました。

このようなインジェラとテフに関する研究を進め、14世紀から19世紀にかけての各種文字記録を渉猟するなか、副食に関する興味深い記述を度々目にし、いくつかの重要な変化が生じていることに気づきました。また主食であるパンの変化を考察するためには、副食とその変化にまで視野を広げる必要性も感じました。そこで副食に関する研究を進め、第31回学術大会において発表を行うことにしました。多岐にわたるテーマを1つの発表としてまとめる作業に直前まで頭を悩まされつつ、当日は「トウガラシの普及」「牛の生肉料理とパンの関係」「豆類の用途の変化」という3つのテーマを

軸に発表を行いました。

エチオピア北部に限らず、アフリカ大陸全域の食文化を考えるうえで欠かせないのが、大航海時代以降の新世界と旧世界の間の動植物等の移動である「コロンブス交換」です。今日エチオピア北部で欠かすことのできないトウガラシは「コロンブス交換」を代表する作物と言えます。エチオピア北部において、トウガラシが多用された料理を確認できるのは1770年代前半の記録ですが、その後1840年代には調味料を含め、唐辛子を用いた多彩な料理が記録されています。トウガラシの普及、そしてそれに伴う副食の変化は大変興味深いものですが、発表を終えて、トウガラシ導入以前に重要な調味料であったカラシナの実、すなわちカラシの利用についても通時的変化の解明が必要であると感じています。

エチオピア北部の副食の中で、この地を訪れた外国人の注目を最も集めたのは牛の生肉料理でした。牛の生肉を食べる際のソースに関する記述を時代順におっていくと、1700年頃までは牛の内臓の内容物を用いたソースが用いられていたこと、その後18世紀後半からトウガラシを主とする味付けが一般的になったことを確認できます。

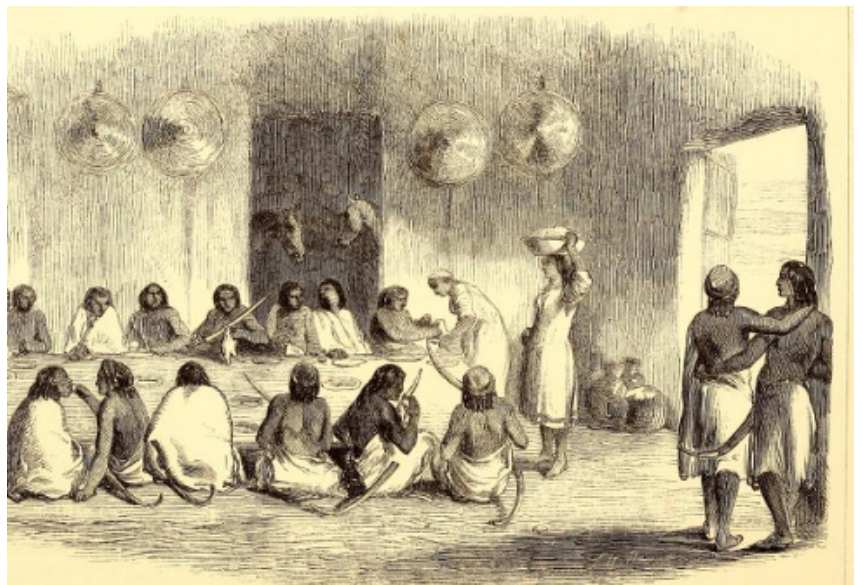


図1. 1840年代のエチオピア北部における宴会の様子 (M. Parkyns, Life in Abyssinia, London, 1853より)

またインジェラの原型と思しき食品が成立したと思われる18世紀後半に、牛の生肉をテフ粉でつくった薄いパンで巻いて食べるという食習慣を確認できますが、この現象はインジェラの成立を考察するうえで重要な意味を持つのではないかと考えています。

今回副食に関して研究を進めるなかで、特に興味をひかれたテーマの1つが、豆類の利用方法の変化でした。現在のエチオピア北部の食文化では豆類は欠かせない食材であり、ヒヨコマメでつくる「シロ」と呼ばれる煮込み料理は重要な副食となっています。ところが1520年代には豆類はパンの材料としての用途が中心であったようで、豆類でつくられたシロが庶民にとって主要な副食になっていたことを確認できるのは1750年代の記録からです。テフの主食化と並行して進行していたと思われる豆類の用途の変化については、別途研究を行う予定です。

文字記録の中に見られる、往々にして断片的で、内容に偏りのある情報を用いて、過去の食文化について探る作業は苦勞の多いものです。しかし今回のエチオピア北部の副食に関する研究では、思いもよらない記述、そして想像もしていなかった変化を見出すことが多く、知的好奇心をくすぐられました。エチオピア北部の副食の変化をめぐる研究は、この地の食文化全体の歴史的变化を考察

するために欠かせないものであるとともに、サハラ以南アフリカの他地域の食文化の変化を考察するうえでも貴重な事例になり得ると思われます。今回の受賞を機にさらに研究を進め、その成果を公表したいと考えています。



写真1. エチオピアの古都ゴンダールの市場で豆などを商う乾物商

日本ナイル・エチオピア学会第31回 学術大会最優秀発表受賞者エッセイ

Mapping Urban Heritages: The Case of Sekota, Ethiopia

**Rumi Okazaki, Tadesse Girmay,
Alula Tesfay, Ikuro Shimizu,
Keita Aoshima, Nobuhiro
Shimizu, Melsew Tefera, Amsalu
Woldie Yalew**

**Text by: Rumi Okazaki
(School of Architecture, Shibaura
Institute of Technology)**

1. How it started

Beatrice Playne who visited Sekota in 1948 described the town in her book, *St. George for Ethiopia*, as the following: *Sekota is quite the most attractive Ethiopian town I have seen, with its two-storied, stone houses*. I had been interested in this town through this text and was curious to know more about its urban history and architecture. When I met the former Ambassador of Ethiopia to Japan, H.E. Mr. Kassa Teklebirhan, who was from Sekota, I was fortunate to receive more detailed information about the town. After several meetings at the embassy in February 2020, I planned to make a short trip to Sekota with Architect Tadesse Girmay from EiABC and Yusuke Yamane, a student from my lab. The three of us were guided by people from the Wag Development Association, introduced to us by the Ethiopian Embassy in Japan. Since time was scarce, it was almost a day trip, but we could see several circular houses and the rock-hewn church of St. Mikael. After the visits, we were convinced that it would be an excellent research area and hoped to come back, but soon after COVID-19 pandemic came, followed by the civil war.

2. Research collaboration

These few years have been hard for everyone, especially for people in Ethiopia. However, despite these difficult circumstances, I am grateful we could continue the work and expand the research. Together with the JSPS research team (Dr. Alula Tesfay, Dr. Ikuro Shimizu, Dr. Keita Aoshima, Dr. Nobuhiro Shimizu), Wag Development Association (Dr. Melsew Tefera, Dr. Amsalu Woldie Yalew), and the Ethiopian Embassy in Japan (H.E. Mr. Kassa Teklebirhan), we were able to hold several online meetings and put together essential information

of Sekota. Monthly trips (sometimes weekly) to the Ethiopian Embassy also helped to plot out the names of the districts and important buildings to create the heritage map of the town. Wag Development Association had taken photos of all the traditional circular houses in Sekota, of which the total number added to 51. These photos were sent to the research team in Japan through the telegram app.

3. Unexpected discovery

Through online research, I found a small copy of the aerial photo of Sekota taken by Georg Gerster in an online journal. It was referenced from a book called “IL (Instituts für Leichte Flächentragwerke) 39” by Eda Schaur, a student of the renowned Architect Frei Otto. The online archive of CiNii showed that this book was available in ten different libraries within Japan. However, at that time, almost all the libraries were closed or only permitted to registered personnel due to COVID-19. It was impossible to access the books. Just when I had nearly given out hope, I remembered that Architect Shigeru Ban was a big fan of Frei Otto and thought that this book might be in his collection in the office. I visited his office and found the book with the aerial photo of Sekota, large enough to depict the circular houses in the central area of the town. A small delightful discovery in the most unexpected place! This is the oldest aerial photo of Sekota found so far and has enabled us to trace the original urban spatial characteristics. Communication with the office of Georg Gerster was also made through email.



Fig. 1. Photos of existing circular houses in Sekota

4. Next steps forward

We would like to thank JANES for the opportunity for us to present the work. The research team is certainly encouraged by this award and hopes to progress further in the coming years. This research is still preliminary, and I believe it could be enhanced with diverse knowledge and ideas. In November 2022, a lecture was made at EiABC on this topic, and over 20 people attended. In the end, we received many questions and comments, all of which should be considered. We hope to go back to Sekota once again and continue the work that we have started.

This project was carried out with the collaboration of School of Architecture, Shibaura Institute of Technology, Ethiopian Institute of Architecture, Building Construction and City development (EiABC), Addis Ababa University, Wag Development Association (Sekota), and the Embassy of Ethiopia in Japan (Tokyo) with funding from JSPS KAKENHI Grant Number 19KK0114. We are grateful for our key informants and staff members of the Ethiopian Embassy in Tokyo.



Fig. 2. Heritage map of Sekota Town, created by authors

フィールド通信

「COVID-19に感染して触れるエチオピアの平熱—平常運転のたくましさとやさしさ」

2022年7月に自分自身がエチオピアで新型コロナウイルス感染症に罹患した経験を書く。

伝えたいことは2点ある。1点目は、コロナに対するエチオピアの人びとの平常運転についてである。2点目は、新型コロナウイルス感染症がこれ以上猛威をふるわないことを祈るばかりであるが、自分自身が陽性判定を受け、隔離生活を送り、周囲の人びとや海外渡航保険に助けられて帰国した経験についてである。情報共有という点から意義があると判断し、ここに共有させていただく。ただ、後述するように、私自身はエチオピアのスペシャリストではないし、コロナ禍で行動が制限されるなか集めることができた情報にも限りがあるので、そのような背景があることをご理解いただきつつ、ひとつの事例として情報を掬い取っていただければ幸いである。なお、ここに書かれている情報は、2022年5月中旬から7月上旬に私がアディスアベバに渡航したときのものである。

さきに要点を書いてしまうと、帰国前PCR検査で私にコロナ陽性反応が出たあとの周囲の人びとの印象的な対応に、私は平常運転のたくましさとやさしさをみた。具体的には、プロジェクト車両の運転手、カウンターパートの大学の先生、同大学の実験室の実験助手、隔離期間も含め2ヶ月弱滞在したホテルのスタッフの対応に、である。コロナの陽性反応が出たとPCR検査機関から連絡があったから、当然彼らにもすぐその事実を伝えた（幸い、プロジェクト関係者でほかに陽性者は出なかった）。彼らは「大丈夫か？」と私の体調を気遣ってくれたが、それは過度な心配でも、行き過ぎた配慮でもなく、また単なる無関心とも異なっているように思えた。滞在中のホテルのスタッフにも陽性結果を伝えた。「ここでは対応できないから、別のところへ移動してほしい」などと言われるかと思っていたが、そのような素振りはいっさいなく、かけられた言葉は「Corona is normal」で、これまでと通常どおりに私を受け入れ、何事もなく接してくれた。文字通りCOVID-19に少し免疫がついてきたとはいえ、それがいざ身近に現れると、過剰に反応してしまったり、過度に敏感になってしまったりと、平静を装えないのが人間ではないだろうか。言葉尻や表情、身振りににじみ出てしまうものである。国も文脈も状況も異なるので単純に比較はできないが、もしエチオピアからのプロジェクト関係者が日本の

Takuya Hagiwara

萩原 卓也

(京都大学アフリカ地域研究資料センター)

ホテルに滞在中にコロナ陽性判定が出てしまったとき、日本で働くホテルスタッフは、周囲の人びとは、私は、エチオピアの彼／彼女らが私にそうしてくれたのと同じように対応することができるだろうか。「Corona is normal」は、決してコロナを軽視している発言ではなく、またコロナを日常に埋没させてしまっているわけでもない。日本で耳にするよりもはるかに、彼／彼女らのコロナとの向き合い方には、with Coronaという響きがリアリティをもっている。後述するように、今回の渡航の用務はエチオピアにおける道直しプロジェクトなので、そんな彼／彼女らの姿勢を「平常運転」と形容してみたい。平常運転は意外に難しい。平常運転には物事を日常に埋没させずに向き合い続けるたくましさと、それらを理解し続けようとするやさしさが必要である。

はじめてのエチオピア長期滞在:

新型コロナウイルス感染症のエチオピア国内における第5波に、ロシアとウクライナの情勢、さらに、エチオピア国内の内戦的状况。久しぶりに海外調査渡航できることの若干の安堵とともに「とんだ時期に来たものだ」と思った。いや、実は落ち着いているときなどないのかもしれない。それは、きっと日本だって同じである。私にとっての日常生活の場である日本にいと、日常という名の「重要な」雑事が、そこで現実として起きていることに対し鈍感になるよう(=効率的になるよう)私を仕向けているに過ぎない。気をつけないと、いろいろな出来事はいつの間にか日常に埋没してしまう。

エチオピアに長期滞在するのは、実は今回がはじめてであった(アディスアベバを含むエチオピアには、過去にもアフリカ研究関連のシンポジウムで短期間だけ来訪したことはある)。博士後期課程からケニアで調査を進めてきた私であるが、縁あって現在、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)・MNGDプロジェクト「特殊土地盤上道路災害低減に向けた植物由来の土質改良材の開発と運用モデル」(*注1)で研究員をしている。このプロジェクトは、交通量の少ない村の道路

の道直しを住民たちの手でできるように社会実装することをひとつのゴールにしている。ただの道ではない。ブラックコットンソイルと呼ばれる、雨季と乾季に膨張と収縮を激しく繰り返す、とてもやっかいな土壌を含む生活道路が相手である。そこに、粉体化した在来植物を工夫して混合し、支持力を強化させ、人びとが安心して通れる道を整備する。もちろん永久的な道ではなく、維持管理が必要な道路である。それを社会実装することが、目標である。私はプロジェクトの2年目(2020年4月)から加入し、意気揚々とエチオピアに長期滞在するはずが、COVID-19のパンデミックにより、2022年5月の渡航がはじめてとなった。加わってから2年後ようやく、プロジェクトが対象とするブラックコットンソイルに触れることができたのである。



写真1_2年越しにはじめて触れるブラックコットンソイル

エチオピアにおけるCOVID-19:

私が渡航したタイミングでは、街中でマスクをしている人はほぼ皆無であった(プロジェクト関係者は感染予防対策を徹底)。「NO MASK NO SERVICE」の張り紙は、まったく効力を失っていたし、消毒液も見当たらない。ただ、ホテルや銀行、洒落たカフェなどは、店員がきちんとマスクをつけて接客していた。街中で着用しているのは10人に1人もいない。コロナなど、どこ吹く「風邪」という具合である。

エチオピアにおけるCOVID-19の状況を把握するのは、(もちろんその数値を信じるか否かは別として)比較的容易だった。関係者が研究調査をスムーズに再開できるように、SATREPS-MNGDプロジェクトは、渡航再開に向けた小冊子を作った(*注2)。その際、これまでのエチオピアにおける推移を調べたのであるが、感染状況を把握するのはさほど難しくなかった。感染拡大期からのエチオピアにおける感染の状況や推移、入国制限や検疫体制、入国後の行動制限、医療体制のひっ迫状況など、変遷の一部も追うことができるので、ぜひ参考してほしい。



写真2_プロジェクトで作成した冊子の表紙と裏表紙

帰国前PCR検査で陽性反応:

今回の渡航は、総じて体調不良との闘いであった。身体を殺菌し続けた2年間が原因なのか、高地であることが原因なのか、はたまた乾季から雨季への急激な気候の変化なのか。ただこの時期は、エチオピアの人びとのあいだでも、体調不良者が続出している状況であった。現地スタッフの家族が通う学校でも、企業でも、多くの人が体調不良を訴えていた。私はプロジェクトの用務を終え、予定通り日本に帰国するために6月28日にPCR検査を受けた。受けたのは、Wudassie Diagnostic Centerによる出張検査である。滞在先のホテルに検査員を派遣してくれて、2,500ブル(特急料金)で検査を受けることができた。事前に予約をし、当日の指定時間にロビーで待ち合わせをし、パスポートを提示し、必要事項を記入のち、検体を鼻の奥から採取され、終了である。所要時間は10分もかかっていない。私も日本の京都市内でPCR検査を受けたことはあるが、長い列に並んで受けたPCR検査よりも、はるかに手際がよく、はるかに快適だった。

事前の約束通り、検体採取から4時間も経過しないうちに、見知らぬ番号から電話がかかってきた。電話の主は、今朝に検体を採取した医療機関であった。帰国の身支度をすでに終えようとしていた私は、「あなたの結果は陽性です」という言葉に驚きを隠せなかった。これは英語の聞き間違いかと思い、何度も聞き直しても、電話の主はロボットのように同じことを言う。感染予防対策を徹底していただけに、ショックだった。そして、「Have a good day」と言われて、電話が切れた。たしかに、コロナ陽性反応が出たからと言って、good dayを送れないとは限らないのかもしれない…。さて、どうしたものか。すぐに関係各所に連絡し、日本にいるプロジェクトのメンバーに大いに助けをもらいながら(その節は本当にご迷惑をおかけしました)、加入していた保険会社に連絡し、今後の対応を協議した。

滞在先のホテルにて隔離生活:

隔離生活のはじまりである。医療機関からは隔離について電話口では何も言われなかった。すぐにJICAエチオピア事務所に方針を確認し、異国での隔離生活がはじまった。当然であるが、文字通り一歩も滞在先のホテルの部屋から出ないようにした。朝食はホテルのスタッフに部屋の前まで運んでもらい、ドアの外に置いてもらう。食べ終わったら、すべての食器やスプーン、フォーク、トレーを自分で入念に洗い、またドアの外に置いておく。昼・夕食はホテルで注文するか、Deliver Addisという宅配サービスを利用した。スマホの専用アプリでレストランを選び、メニューから好きなものを注文できる。注文してから1時間前後で届けてくれることが多かった。ホテルの玄関まで届けてもらい、それをスタッフに頼んで部屋の前まで運んでもらった。クレジットカードを登録して支払うこともできるので、現金を介す必要もなかった。スタッフは私に過度に配慮するでもなく、部屋のドア越しにいつもの簡単な挨拶を済ませる。通常時とまったく同じように、私に接してくれた。



写真3_隔離生活を送っていたホテルで迎えるいつもの朝



写真4_宅配サービスでは日本食レストランも利用可能

体調はいたって普通で、喉に少し違和感がある程度だった(いわゆる、喉がイガイガする感覚)。高熱や倦怠感もなかった。ほんの少しの微熱、乾いた咳、そして、2日間ほど嗅覚が鈍くなったと感じる期間があった。日本帰国のおみやげに大量に買っておいだした珈琲豆の袋の匂いを、ふと感じないことに気がついた瞬間があった。ただ、容体が急変することがあるということもパンデミック当初にはとくに言われていたので、ほんの少しだけ怖かった。

加入していた海外渡航保険にリモート診療なるものがあるというので、アレンジをお願いしていた。ただ、現地の医療機関との調整に時間がかかり、ようやく受けることができたのは、アレンジをお願いしてから2日後の7月1日だった。Medical Director at AMREF Flying Doctorsのケニア人医師とZoomで20分ほど話をした。こういうところでも、Zoomというツールがいきてくるとは思ってもみなかった。ひと通りの問診を終えたあと、アドバイスをもらった。「孤独だと思うから、家族や友人と連絡をとるように」と言われたのが印象的であった。至極まっとうなアドバイスであるのだが、そのときの私にはとても響いた。担当医師から、「症状がない状態が続くならば、7月4日にPCR検査を受けてみて、陰性であれば帰国してよい」と告げられた。渡航の際に保険に入ることは多くの場合義務づけられていると思うが、あらためてその重要さが身に染みた。

再検査、そして帰国:

PCR検査陰性証明書を取得できないと、日本に入国させてもらえない。陽性者は一定の隔離期間が終了しても、陽性判定が出続けることもあるというので、気が気ではなかった。今度はドライブスルー方式のPCR検査を受けた。一度も車から降りる必要はない。会場に行って、パスポートを提示し、必要事項を記入する。料金を払い、窓を開けて検体を採取してもらい、あとはメールアドレスに検査結果を記したPDFが送られてくるのを待つだけである。ドライブスルー形式は、日本でも実施されていたところはあるようだが、なんと手際の良いことか。Washington Clinicが提供するミレニアム・ホール(ボレ空港近く)のPCR検査所にて、スムーズに受けることができた。料金は2,400ブル(特急料金)。クレジットカードでの支払いも可能であった。4時間もたたないうちに検査結果が送られてきて、無事に陰性が証明された。ホテルのスタッフにそのことを告げると、「そうか、よかったね」と言葉が返ってきた。マスク越しにもわかるような作り笑顔を(私を安心させようと)見せるわけでもなく、過度に気遣うわけでもなく、表情や身振りをとって、実に平常運転である。

隔離期間終了にともない、帰国日を変更しようにも、どういわけかその後2週間のエコノミークラスはすべて埋まっていた。ビジネスクラスもしくはファーストクラスしか空席がない状況であった。どうしたものか。私事であったが、第2子の出産を月末に控えていることもあり、焦っていた。保険会社に相談してみると、エコノミークラスが満席であることが証明できれば、ビジネスクラスでも問題ないとの

回答であった。ただし、ビジネスクラスでさえも満席の日もあり、空席ありの日も残り数席という状況であった。幸い、どうにかビジネスクラスの席を確保できた。日本で待つ妻と息子に少しでもビジネスクラスを体験させたくて、空港のビジネスラウンジで提供されていたマフィン(=ジュース)をこぞと、リストにあるものをすべて注文した。悲しい性である。フルフラットになる座席の恩恵で、疲れがまったく残らない状態で、日本に到着することができた。「ビジネスクラスなんぞ、ただ豪華なだけだ」とこれまで半分馬鹿にしていたが、労働の効率という意味においては、その空間にお金を払う価値があることがわかったことも、私には収穫であった。まったく疲れがない状態で到着できれば、すぐに日常に埋没することも可能というわけだ。

最後に:

世界で猛威をふるっているコロナに感謝することなど毛頭ないが、事実として、罹患したことにより経験できたことはあった。それは、エチオピアの人びとの平常通りの対応しかり、ビジネスクラスでの異空間体験しかり、どれも出発前には想像していなかった、素直に人生の糧となる経験であった。ただ、経験してみても思うことは、コロナもビジネスクラスももう御免だ、ということである。もちろん、ビジネスクラスが似合う大人にあこがれなくもないが、私にとってあのビジネスクラスは、現時点で自分を日常に埋没させてしまうものにほかならない。エコノミーは快適でないぶん、格別な疲労感や痛みとともに現実を私に突き付けてくれる。今回の滞在は、平常運転を可能にするたくましさややさしさを私にあらためて教えてくれた。

2022年9月、長期滞在2回目のエチオピアにて、新年を迎えながら

(※注1)プロジェクトのウェブサイト:<https://mngd.africa.kyoto-u.ac.jp/>

(※注2)萩原卓也・池田あいの・松隈俊佑・重田眞義 2022 『新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行下のエチオピアで安全にフィールドワークするために』重田眞義・金子守恵(監修)地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)MNGDプロジェクト。この冊子は、SATREPS-MNGDプロジェクトを実施する京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員が執筆と編集にあたり、教員が監修した。記述の内容と資料はいずれも2022年3月時点までに得られた、エチオピア保健省、エチオピア公衆衛生研究所、在エチオピア日本国大使館等によって発信された情報をもとに最新の現地情報を加えて編集したものである。プロジェクトの研究員が2021年3月から5月、および8月から11月までエチオピアに渡航・滞在した際に得た情報も参考にしている。

学会動向

■2022年度総会

2022年4月17日(日)にオンラインにて、日本ナイル・エチオピア学会2022年度総会が開催されました。議題は以下のとおりです。

議事

- ・2021年度事業報告 について
- ・2021年度会計報告及び会計監査報告
- ・2022年度事業計画案について
- ・2022年度予算案について
- ・NES編集委員会 2021年度活動報告報告
- ・2023年度以降の学術大会の開催について
- ・第28回日本ナイル・エチオピア学会高島賞について
- ・新たな運営体制について
- ・会費について
- ・国際エチオピア学会について

2021年度事業報告ならびに2022年度事業計画案は以下のとおりです。

2021年度事業報告

- 1.第30回学術大会
2021年4月18日(日)
オンライン開催(主催:徳島大学)
- 2.第27回高島賞の授与
高島賞の授与なし。
- 3.第30回学術大会最優秀発表賞の授与
石川博樹「16~18世紀のエチオピア北部におけるテフの重要性の変化について」
- 4.学会誌の発行・編集
Nilo-Ethiopian Studies No.26の編集・J-Stageへの掲載・オンデマンド印刷と発送(名誉会員とアフリカ・アジアの図書館)
- 5.ニューズレターの発行・編集
JANESニューズレターNo.29-1の編集・発行
- 6.会費請求
2021年6月に請求書を送付した。
- 7.評議員選挙
2022年1月26日に投票用紙の発送を行い、投票用紙の返送は2月16日とした。2月24日に龍谷大学において、田中利和会員(選挙管理委員長)、松原加奈会員(選挙管理委員)、山崎暢子会員(選挙管理委員)により開票作業が行われた。投票数41票のうち、有効投票39票、無効投票2票であった。投票の集計により、得票数上位35名が当選

となった。開票結果は事務局に通知され、当選者には事務局から承諾書が送られた。繰り上げ当選はなく、開票結果と同じ35人の評議員が選出された。

2022年度事業計画案

1. 公開シンポジウム「エチオピアの連邦制再考：民族といかに向き合うのか」2022年4月16日（土）、オンライン開催（主催：アジア経済研究所）
2. 第31回学術大会
2022年4月17日（日）
オンライン開催（主催：アジア経済研究所）
3. 第28回高島賞の授与
4. 第31回学術大会最優秀発表賞の投票
5. 学会誌の編集・刊行
Nilo-Ethiopin Studies No.27の編集・J-Stageへの掲載・オンデマンド印刷と発送（名誉会員とアフリカ・アジアの図書館）
6. ニュースレターの発行・編集
JANESニュースレターNo.29-2, No. 30-1, 30-2の編集・公開
7. 会費請求
2022年6月に請求書を送付する。

■ 第31回学術大会

2022年4月16-17日に、日本貿易振興機構アジア経済研究所の共催のもと、第31回学術大会がオンラインで開催されました。最優秀発表賞には、石川博樹（東京外国語大学）、相原進（京都大学）、Rumi Okazaki（代表発表者、芝浦工業大学）、Alula Tesfay, I. Shimizu, K. Aoshima, N. Shimizu, Melsew Tefera, Amsalu Woldie Yalewが選出されました。公開シンポジウム及び研究発表の演題と発表者は以下のとおりです（敬称略）。

【公開国際シンポジウム「エチオピアの連邦制再考：民族といかに向き合うのか」】

児玉由佳（アジア経済研究所・司会）趣旨/背景説明
眞城百華（上智大学）

「エチオピアにおける民族連邦制とティグライ人民解放戦線」

石原美奈子（南山大学）「オロミア州はオロモのものなのか？」

吉田早悠里（名古屋大学）「南部諸民族州からの分離・独立 エチオピア南西部と少数民族」

落合雄彦（龍谷大学）「皇帝のものは皇帝に？：ナイジェリアの連邦制は軍事政権下でいかに変容したのか」

【研究発表】

川口博子「国際刑事裁判における被害経験の共有

と差異化—ウガンダ北部アチョリ社会を事例に」

鈴木功子、金子守恵「高齢者の生活機能に関する評価尺度の検討—超高齢社会における発達・加齢観の刷新にむけて—」

石川博樹「16～19世紀のエチオピア北部における副食」

相原進「エチオピア国立劇場のダンサーたちの技術習得とキャリア・ディベロップメント」

田中利和、是恒さくら、伊藤大亮、甲斐洋行、井上雄太、カッバラレゲサ、ウォリソの人びと、株式会社丸五「Ethio-Tabiの創造に関する実践的地域研究」
「MARUGO TOKYOでのエチオピア産地下足袋の協奏展示」

Rumi Okazaki, Alula Tesfay, I. Shimizu, K. Aoshima, N. Shimizu, Melsew Tefera, Amsalu Woldie Yalew “Mapping Urban Heritages: The Case of Sekota, Ethiopia”

Alula Tesfay Asfha, R. Okazaki, N. Shimizu, K. Aoshima, R. Miyake “Architectural Heritage Conservation and Higher Education in Ethiopia”

会員の異動

入会

2021年度入会者 Alula Tesfay(筑波大学・学生会員)

2022年度入会者 原田陽子(なし・正会員)
大坪玲子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・正会員)
川崎亮太(農家・正会員)

退会

2022年度 なし

編集後記

今年度より編集委員が一新されました。会員の皆様に有益な情報をお届けできるように委員一同努力いたします。引き続き、お力添えをいただけますと幸いです。（松波康男）



JANESニュースレター No. 30-1

2022年12月26日配信

編集・配信：日本ナイルエチオピア学会

編集委員：松波康男、相原進、清水信宏

表紙写真： イレッチャ祭を祝うオロモの若者たち（アディスアベバ）
撮影： 松波康男（2022年10月1日）